

芸術的行為による造形物の超特異化と 共感的ネットワークの形成に関する研究 —高校生を対象とした金属素材を叩く造形活動の実践と分析

茂木 和佳子*・大平 修也**・松本 健義***

(令和4年1月31日受付；令和4年6月3日受理)

要 旨

本研究では、人と物や人同士の関係を新たな「社会性」として形成すると共に、人が自分なりのつくり方や造形物の形や価値を生み出していく芸術的行為の作用を明らかにすることを目的とした。そのため、筆者が先行研究において検討した、高校生を主とする行為者10名と物や行為者同士が一体的に関わり共感の関係を形成した題材を中心とする事例を改めて徹底的に記述分析して考察した。事例は、行為者が金属素材を叩く造形活動場面、造形活動の経験について行為者が語り合う場面、美術館に展示した行為者の造形物が鑑賞者に触れて味わわれる場面で構成される。事例の記述分析と考察により、芸術的行為の作用として、自他の造形物や活動場所の価値を生み出す行為者と物や行為者同士の相互作用と、鑑賞者の鑑賞場面で実践された相互作用との関係を、造形物の触り心地を共有する共感の関係として形成することを明らかにした。本研究の記述分析と考察は、異なる場所と時間において生み出された相互作用同士の関係を描き表すネットワークそのものであるといえる。

KEY WORDS

Site-Specific サイト・スペシフィック, Formative activity 造形活動, Super Singular 超特異化, Actor-Network Theory アクターネットワーク理論, Empathy 共感

1 問題の所在及び研究の目的と方法

1. 1 問題の所在

新潟県南魚沼市池田記念美術館(以下、I美術館)では、地域に開かれた美術館連携の取り組みとして次の2つを実践している。①2017年より年1回、小学校、中学校、特別支援学校、アーティストが協働して、各校の子どもを対象とする造形活動のワークショップを行い、子どもがワークショップで制作した造形物とアーティストの造形作品を同じ空間に展示する展覧会「八色の森の子ども絵画展」及び「八色の森の美術展」⁽¹⁾。②地域のK高等学校における全15回の探究型学習(総合的な探究の時間)において、I美術館がコーディネートしたアーティストや研究者、またはI美術館長(以下、館長)や第1筆者が担当する授業「地域と連携した『新しい美術館を創ろう』」⁽²⁾。第2筆者は、「地域と連携した『新しい美術館を創ろう』」の時間を借りて、第1学年の高校生8名と卒業生1名及び館長を合わせた計10名を対象に題材「叩いて出合う金属の表情」(以下、本題材)を行った。本題材は次の2つの活動で構成された。①活動場所を共にしながら素材(φ32×22mmのアルミ合金棒)を金槌で叩く造形活動(2020年2月20日15時20分～16時10分、図1)。②つくり出した互いの造形物に触れたり見たりして味わいながら、造形活動で見付けたことや感じたこと、興味をもった他の人の語りなどを感想シートに書きながら語り合う活動(同日16時30分～17時50分)。更に、高校生8名と卒業生1名がつくり出した9点の造形物をI美術館に展示する「『叩いて出合う金属の表情』展」(以下、本展覧会)を行った(2020年3月12日9時00分～4月5日15時00分、図2)。

本研究では、大平修也(2021)⁽³⁾、大平修也・松本健義(2021)⁽⁴⁾、大平修也・茂木和佳子・松本健義(2021)⁽⁵⁾において分析考察した本題材の形成したものについて、「身体」⁽⁶⁾と「社会的」⁽⁷⁾の視点から改めて分析考察する。



図1 叩き台(ルール、ハチノス、アンビル、砂袋)



図2 「叩いて出合う金属の表情」展会場

鷺田清一は、芸術実践と「社会的」^{ソーシャル}の関係性を重視する。鷺田は、「ひとは『充足した独房』か『欠乏した自由』かの選択に直面する。『充足した独房』では、ひとは画一化され、あらゆる未来は予測可能なものとなる。だが、人間は次の瞬間が見えつづけることにはついに耐えられないだろう。一方、『欠乏した自由』においては、次の瞬間が予測できない。それは怖ろしく不安定なことではあるが、ひとはそこですくなくとも自由の糞詰まりからは解き放たれ、だれにでもなりうるという主体性を取り戻す⁽⁸⁾と述べる。鷺田は、「『画壇』『楽壇』といったエスタブリッシュメントへの登録からあえて外れ、『欠乏した自由』を犠牲にしないかぎりのところでアート『市場』には適度につきあいながら、その欄外、あるいは欄外近くに位置をとって活動してきたアーティストたち」がいるとする。「かれら(アーティスト)は、特定の組織に所属せず、ということは組織の上部へと駆け上がることを望みもせず、そのことで財をなすこともめざさずに、社会生活の、そして芸術のジャンルなど存在しないかのごとく脱領域的にその活動を繰りひろげる。絨毯のように目の詰まった社会の編成あるいは社会の混沌のなかに、それまでになかった隙間を開いてみせる。だから既存のポジションにうまくはまっている人たちからは、何を^{なりわい}生業にしているのか不明な人、つまりは『得体の知れない人』と映る⁽⁹⁾(()内は筆者)とする。そうしたアーティストは、「都市に住まうほとんど唯一の『無認可』の職業人といえるかもしれない。その活動は、無認可でかつ往々にして無報酬であるにもかかわらず、浮浪者や身元不明者、アウトローとは異なって固有名でメディアに採り上げられもするし、ときに公的な団体や市民グループから寄付や助成を受けもする。社会のマジョリティが共有しているような世界把握、世界感情にたいしては、それぞれに固有な違和感を、ときに寝た子を起こすかのように、ときに人の心を逆なでするかのように、ときに市井の人たちの目にもとまらないほど微弱に表出していて、それがまた批評の対象となる、そういう〈違和〉や了解不能の表現によって一定の社会的なポジションが認められる存在である⁽¹⁰⁾とする。「かれら(アーティスト)は法律すれすれのゲリラ的な表現行為を持続的におこなうこともあれば、何を^{なりわい}する人かよくわからないけれど『手』としてやってきてくれる人として、被災地の救援や障害者の支援、地域のイベントや子どもたちのワークショップといった事業に匿名のままかかわることもある。(中略)これら社会的なイベントを立ち上げる、あるいはそれに参加する昨今のアーティストたちを見ているかぎり、個人のアーティスト的な『才』を発揚すること、そしてそのためにみなが結集することをめざしては見えな^{ゆる}い。というよりもむしろ、イベントごとにアーティストとノン・アーティストの境界すら取っ払ったゆるいグループを構成し、まるでセッションのように離合集散をくり返しているように見える。(中略)ここに立ち上がりつつある〈社会性〉とはいったい何なのか⁽¹¹⁾(()内及び中略は筆者)と述べる。「アーティスト」と、「地域のイベントや子どもたちのワークショップといった事業」への参加者に「欠乏した自由」を味わわせながら、「アーティストとノン・アーティストの境界」を取り払う「セッション」を実践し、ある種の「社会性」を立ち上げるアートとして、鷺田は、川俣正が提唱し実践する「サイト・スペシフィック」⁽¹²⁾に着目する。

川俣は、「アートの現代史の中で語られる『サイト・スペシフィック・ワーク』は、一九六〇年代のアメリカから発生した一連の『アース・ワーク』、『ランド・アート』と呼ばれるものから端を発している。(中略)時代的にも世界規模で環境問題が取り沙汰され始め、『場(サイト)と人間との関係』を考えるコンセンサスが一般的にもでき始めてきた⁽¹³⁾(中略は筆者)とする。川俣は、「七〇年代後半、このようなアートの歴史的なレファレンスと社会状況を下敷きにしながら、当時盛んだったインスタレーションの手法で、サイト・スペシフィックに場を考えるとところから私は自分なりの作品をつくることを始めた。(中略)『他力本願』という言葉があるが、自分はどうも『場力本願』とでもいうのだろうか、どこかでこの場(サイト)ということにすべての行為の判断の材料を託しているように思える⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾(中略は筆者)とする。そして、「サイト・スペシフィック」について、「この時にこの場でしかできないというミニマルなモチベーションの中にある可能性が、新たな場を顕在化してくれる最も有効な手段のことである。それは地球規模の環境問題や、都市や生活空間を考えることから、歴史的、政治的、文化的な場の成り立ちまで含まれる。(中略)そこで出来上がるものは、私が見て感じた、まさにそこで生活している彼らのことであり、彼らの日常のことであったりするわけである。と同時に、その中に彼らが見えなかったり考えられなかったことを、部外者である私がどこかで少しでも具現化した時、彼らにとっては今までになかったものがその場にわずかばかり出現することになる⁽¹⁶⁾(中略は筆者)と解説する。

鷺田は、「同一のイメージを共有するというかたちでみなが結集することの対極にあるいとなみ」としての「サイト・スペシフィック」を通して、「集団を、内部に向けて集結させるのではなく、未知のものへと開いてゆくこと。たがいに差異を深く内蔵したまま、ゆるやかではあるがけっして脆くはない^{ちゅうたい}紐帯をかたちづくること。そういう〈未知の社会性〉の芽ばえに、〈自由〉の新しいかたちの生成」を目指すことは、「何の意味があるのかよくわからない小さな行為の連りのなかで、物たちとの関係が変わる、たがいの関係が変わる、そのような愉しみといいかえてもよい⁽¹⁷⁾と述べる。

本研究では、造形物をつくと共に造形物を介して語り合う過程、あるいは造形物に触れて形や感触や重さなどを味わう過程で形成される、人と物(道具や造形物)や人同士の関係を紐帯と位置付ける。また、本研究では、造形活動や語り合う活動を行う行為者と造形物及び道具といった「物たちとの関係」や、鑑賞活動において造形物を味わう鑑賞者と「物たちとの関係」を変化させて、行為者と物や行為者同士(あるいは鑑賞者と物や鑑賞者同士)の紐帯を新たな「社会性」として形成する「サイト・スペシフィック」の特性をもった活動を芸術的行為と位置付ける。そして、本題材がもつ芸術的行為の特性について検討する。本題材では、「アーティスト」または講師として活動に参加した第2筆者と、「ノン・アーティスト」または行為者として活動に参加した10名とが、高校生の生活の場となっている学校の教室を活動場所としながら、同様の道具を使い同様の素材を叩く「セッション」を通して、個々に固有の叩き方及び固有の造形物を「〈自由〉の新しいかたち」として実践しつくり出した。本題材の実践の過程は、行為者が、自らの叩き方と造形物の形とを対応させながら、個々のつくり方を模索していく、「次の瞬間が予測できない」、「欠乏した自由」を味わう「サイト・スペシフィック」に共通した要素をもつことから、芸術的行為が実践される可能性があるといえる。しかし、以下の2点から、本題材は、完全な「サイト・スペシフィック」の実践ではないといえる。①本題材で使用した素材や叩く道具は第2筆者が学校の教室へと持ち込んだものであり活動場所にとっては遺物であること、②川俣が述べる「場力本願」のコンセプトを軸に本題材を計画していないこと。

本題材と本展覧会を分析考察した先行研究に、大平(2021)、大平・松本(2021)、大平・茂木・松本(2021)がある。大平(2021)は、バフチン(Михаил Михайлович Бахтин)の「対話」⁽¹⁸⁾、フッサール(Edmund Gustav Albrecht Husserl)の「生活世界」⁽¹⁹⁾、ホール(Stuart Hall)の「節合」⁽²⁰⁾、ヴァイツゼッカー(Viktor von Weizsäcker)の「ゲシュタルトクライス」⁽²¹⁾からつくり出した研究モデルを用いて、本題材を微視的に分析考察し、行為者同士や行為者と造形物の共感の関係が形成される過程を明らかにした。大平・松本(2021)は、「ゲシュタルトクライス」と橋本真之の著『造形的自己変革』⁽²²⁾の視点から本題材を微視的に分析考察し、造形物を介して互いの存在や経験が行為者相互に味わわれる共感的な身体経験と、自身のふるまいの変化及び素材や造形物の変化が一体的につくり出される「造形的自己変革」とが生成される学びの過程を明らかにした。大平・茂木・松本(2021)は、「ゲシュタルトクライス」と浜田寿美男の「四項関係」⁽²³⁾の視点から、本題材でつくられた造形物を展示する本展覧会を微視的に分析考察し、造形物の形や色、手触りや重さなどを造形物のよさとして味わう身体経験に基づき新たな意味や価値を創造していく鑑賞の学びの過程を明らかにした。一方、茂木和佳子・松本健義(2021)⁽²⁴⁾は、「アクションリサーチ」⁽²⁵⁾とラトゥール(Bruno Latour)の著『社会的なものを組み直すアクターネットワーク理論』における「社会的」⁽²⁶⁾の視点から、本題材及び本展覧会を最終の活動とした授業「地域と連携した『新しい美術館を創ろう』」を分析考察し、高校生、高等学校、美術館、研究者、それらと連携する「一般社団法人 愛南魚沼みらい塾」が相互変容しながら学びの場を創造していく共同体の実践過程を包括的に明らかにした。

先行研究では、本題材を微視的に分析考察することにより、行為者と物や行為者同士の紐帯を新たな「社会性」として形成する芸術的行為の作用が、高校生、高等学校、美術館、研究者などの相互作用を通して実践されることを明らかにしていない。本研究では、自他のふるまいや身体を介して形成される共感の関係や、「社会的」⁽²⁶⁾の視点を用いた先行研究の手法を継承しながら、高校生、高等学校、美術館(館長)、研究者(筆者)などが相互作用した本題材に焦点化して、高校生8名、同校卒業生1名(大学1年生)、館長といった行為者10名と物や行為者同士の紐帯が新たな「社会性」として形成されると共に、行為者が「欠乏した自由」を経験していく活動の過程を微視的に分析考察する点に独自性がある。

1. 2 研究目的

本研究では、以下の2つの芸術的行為の作用を明らかにすることを目的とする。①人と物や人同士の紐帯を新たな「社会性」として形成する作用。②人が造形活動や造形物を介した語り合いの過程で「欠乏した自由」を経験する学びの作用。

1. 3 記述分析及び考察の視点

1. 3. 1 超特異化が形成する行為者と物や活動場所の関係としての紐帯

自らの身体と叩く行為を介して、金槌などの叩く道具と素材との関係を形成していく行為者の活動過程を捉えるには、市川浩の「身体」の視点が有効である。

市川は、「傾いている家の前に立つと、平衡感覚がおかしくなって、地面が坂になっているように感じる場合があります。(中略)われわれのからだの外まで広がる身体図式と外の空間図式が、逆転したり、ずれたりするので、頭ではわかっている、生き身が混乱してしまうのでしょうか。このようにわれわれが主体的に生きている身体(主体身

体)は、決して皮膚の内側に閉じ込められているわけではありません。皮膚の外まで拡がり、世界の事物と入り交わっています⁽²⁷⁾ (中略は筆者)と述べる。そして、「物とのかかわりで拡大する身体」の例として、「われわれはさまざまな道具を使います。道具を使う場合、われわれのからだは、道具を身のうちに組み込み、道具の中にまで拡がっていきます」と述べ、「外科医が(患者の)体のなかをゾンデという金属の棒で探ります。そのとき外科医はゾンデをもっている指先で感じているはずで、ところが熟練してくると、だんだん感覚がゾンデの先まで伸びてゆくといえます。そしてゾンデの先端で感じることができるようになる。そうしなければ、ゾンデを使いこなすことはできません。恐らく盲人の杖の場合でもそうでしょう。最初は手元で感じていても、だんだん杖の先で感じられるようになる。そういうふうからだが拡大する⁽²⁸⁾ (()内は筆者)とする。また、人同士の関係について、「たしかに他人は私をわかってくれないし、他人の気はしれない。確実なのは私だけだ、という気持ちにおそわれることは少なくありません。ここから確実に実在するのは自分だけだ、という独我論へと移行するのは自然の成りゆきでしょう。他者が確実に実在するといえるためには、私が私をとらえるように、直接確実に他者をとらえる、つまり他者を生きることができるようでなければなりません。(中略)しかしこれは私が実質的に他者の身そのものになることを意味します。これは事実上不可能だというばかりではありません。原理的に不可能なのです⁽²⁹⁾と述べる。「逆に私が実質的に他者の身そのものになりきれないということが、まさに他者であることの意味であり、恥ずかしさや照れをとおしてこのような主体としての他者を私は直覚しています。さらに積極的に私が他者を把握するのは、他者と感应的に同一化し、感応において他者の身になるときです⁽³⁰⁾と述べ、「他者の身そのものになれない交換不可能性と感应的ないし構造的同調によって、他人の身になる交換可能性とのダイナミックな統一において、われわれは自己と他者を同時に把握するのです。(中略)われわれは他者を把握する深さに応じて自己をとらえ、自己をとらえる深さに応じて他者を把握する⁽³¹⁾とする。本題材の活動の過程では、素材と叩く道具を行為者が自らの「身のうちに組み込」むといった、行為者と物との共感の関係が形成されるといえる。また、活動場所や叩く行為を共有したり、造形物に刻まれた金鍍の痕跡を味わい合ったりする過程で、行為者は、自らの「他者」として存在する他の行為者のふるまいやその軌跡を「把握」し、相互に「感应的に同一化」していくことで、互いに「感応」「同調」し合い互いの「身になる」といった、行為者同士の共感の関係を形成するといえる。従って、本題材では、行為者と物や行為者同士の共感の関係が形成されていく過程で、個々の行為者が、物や他の行為者といった「他者を把握する深さに応じて自己をとらえ、自己をとらえる深さに応じて他者を把握する」といえる。市川は、人が「感应的ないし構造的な同調によって、他人の身になる」といった現象に着目し、「身」という人の特性が「関係的存在としてあり、そして何との関係においてあるかということによって、身のあり方がきまってくるということの意味する。(中略)つまり身は固定した一つの実体的統一ではなく、他なるもの—他なるものなかには物もあれば他者もあるわけですが—そういう他なるもののかかわりにおいてある関係的な統一である⁽³²⁾ (中略は筆者)とする。市川は、「身」による「関係化は同時に自己中心化でもある。自己中心化には、自己を相対的な意味で実体化するという側面があります。(中略)つまり関係的存在としての身は、〈関係化〉という側面と相対的な意味での〈実体化〉という側面をもち、〈関係化〉と〈実体化〉をたえずくり返しながらかつて自己形成していく⁽³³⁾と述べる。市川は、「関係化」を「動的なかわり」とし、「その動的なかわりの二つの側面が〈中心化〉と〈非—中心化〉(狭い意味の脱中心化と非中心化)」であり、「〈中心化〉というのは、身が自己組織化することによって自己を中心にして世界とかかわること」と述べ、「中心化に応じて自然というものが差異化され、意味をもったものとして分節化されてくる⁽³⁴⁾とする。「中心化」は、「まさに関係化の一面であり、他との関係において中心化が行われます。そのような他なるものに現実的に(場所なんかの場合には、現実的に移動できるわけですが)、あるいは仮説的に中心を移すことによって、狭い意味での〈脱中心化〉が行われます」とし、「自身の身の原点が〈いま・ここ〉」であり、「その〈いま・ここ〉に癒着した視点を仮説的に変換することによって、別な時、別な場所も〈いま・ここ〉になりうるという交換可能性が把握される⁽³⁵⁾とする。「脱中心化は比較的知的なレベルでの自他の視点の交換可能性を身をもって生きること」だが、「同時にわれわれは自己と他者が分かれな共生状態に最初あり、またたえずそういう集合的な共生状態のなかへと自己を溶解しようとする傾向をもつ。それを〈共生化〉ないし狭義の〈非中心化〉と呼んで、広い意味での〈非—中心化〉(脱中心化を含む)の一面として考えたい⁽³⁶⁾と述べる。市川は、「〈中心化〉と〈非—中心化〉」の考察を通して次のように述べる。「異質であるさまざまな場所の中に一きわ目立つ場所があります。非常に大きな岩があるところとか、高い木がそそり立っているところとか、あるいは大きな窪みのある場所、深い森などですが、われわれはそういう場所に何か特異なものを感じます」とし、「こうした性質の非連続的なちがいを、われわれはその場所を囲ったり、仕切ったりすることによって、さらに特異化します。それを〈超特異化〉と呼ぶことにします⁽³⁷⁾。更に、「そうした超特異化された中心によって再編成が行われる」と、「われわれは自己が中心ではなく、そういう聖なるものを中心にして世界が秩序づけられていると感ずる⁽³⁸⁾。「超特異化」された「象徴と、われわれの身の上—下がもつ、シンメトリックでない価値の対立は互いに

照応している。だから〈身〉と、聖木とか、家とか、神殿とか宇宙とかは互いに照応し、しばしば一種の入れ子構造をなしている。そういう入れ子構造の中に身があるとき、われわれは一番アットホームに感じ、自分が根拠づけられている、自分の存在理由があるという感覚をもつ⁽³⁹⁾とする。市川は、そのように「環境」や「空間が分かれてくる(分節化される)のは、われわれが身を中心にして世界を方向づけ、価値づけているから⁽⁴⁰⁾と述べる。本題材における造形行為の過程では、叩く行為が素材へと施されていくことで、行為者ごとに異なる痕跡をもった造形物がつくられていく。そうした個々の造形物は、それぞれに特有の「異質」さをもつが、共に活動の過程を過ごした行為者にとっては自らの「身」の一部として「拡大」した物であり、行為者の「欠乏した自由」が対象として表出された物であるといえる。また、本題材においてつくられた個々の「異質」さをもつ造形物には、行為者同士の語り合う活動を経て新たな「価値づけ」がなされていく。行為者相互の造形物への「価値づけ」は、造形物として「拡大」した個々の行為者の「身」が他の行為者に受容されたことを意味している。行為者相互の「価値づけ」を経て「超特異化」されていく造形物は、行為者相互の「身」を活動場所へと「拡大」させていく「象徴」として作用すると共に、活動場所も、行為者同士が互いを受容し合う特別な場所として「価値づけ」され「超特異化」していく。行為者にとって、造形物や活動場所が「非-中心化」の対象となり、行為者、造形物、活動場所が「互いに照応」する「入れ子構造」の関係が紐帯として形成され、「自分が根拠づけられている、自分の存在理由があるという感覚」が行為者に味わわれるといえる。

本研究では、造形活動や語り合う活動の過程で人の「身」を「拡大」し、素材、活動場所、造形物などの対象へと人を「非-中心化」させて、人と対象の「入れ子構造」を形成する対象の変化を超特異化と位置付ける。

1. 3. 2 共感的ネットワークとして描き出す人や物の関係としての紐帯

行為者と物や行為者同士の紐帯を新たな「社会性」として形成する芸術的行為の作用を捉える視点として、ラトゥールの「社会的」の視点が有効である。

ラトゥールは、「社会学者が何かしらの事象に『社会的』という形容詞を加えるとき〔「〇〇は社会的だ」という場合〕、社会学者が指し示しているのは、安定化した物事の状態／事態であり、一つの束になった〔人や事物の〕結合であること、そして、そうした社会的なものが、後には、別の何らかの事象を説明するために持ち出されることだ。(中略)、『社会的』という語が、『木製』『鉄製』『生物的』『経済的』『精神的』『組織的』『言語的』などと

表1 ラトゥールのアプローチが重視する視点(ラトゥール, 2019: pp.13-14)

①社会的な秩序に種差的なものは何もないこと
②いかなる種類の社会的次元も「社会的コンテクスト」もなく、「社会的」ないし「社会」というラベルが貼られるような明確な実在領域もないこと
③他の学問領域では説明が付かなかった特徴を「説明」するために「社会的な力」を持ち出せないこと
④構成員たちは、自分が何をしているかについて、たとえ観察者の満足のいくように明確に表現できなくとも、とてもよくわかっていること
⑤アクターは社会的コンテクストに埋め込まれておらず、どんな場合でも「単なるインフォーマント」をはるかに超えた存在であること
⑥他の科学の専門領域に何かしらの「社会的要因」を付け加える意味は何もないこと
⑦「社会の科学」を通して得られる政治的な意義は、必ずしも望ましいわけではないこと
⑧あらゆるものが「コンテクストのなかに」枠づけられると言われたりするが、「社会」はそうしたコンテクストでは決してなく、むしろ、狭い導管を循環している数々の連結装置〔人や事物を結びつけるもの〕のひとつとして解釈されなければならないこと

いった他の形容詞とおよそ同列のものであると言わんばかりに、一種の素材を意味し始めると、問題が起きてしまう⁽⁴¹⁾ (中略は筆者)とする。「社会的という語は、二つのまったく異なる事柄を指し示す」とし、第1に「〔さまざまな人や事物が〕ひとつに組み合わせる動きを指し示している」とし、第2に「他の素材と異なるとされる種差的な成分を指し示してしまう⁽⁴²⁾と述べたうえで、ラトゥールは表1⁽⁴³⁾の視点を重視し、第1の「事柄」を採用する。そして、「『社会的なもの』は、〔経済、法、宗教など〕他の多くの種類の連結装置によってひとつにくっつけられるもの」であり、「社会的なまとまりを、経済学、言語学、心理学、法学、経営学などによって作り出される種差的なつながり／連関(association)によって説明されるべきもの」と捉えて、「社会学」を「つながりをたどること(tracing of association)と定義し直し、「社会的でない事物同士のある種の結びつき(a type of connection)を指し示す⁽⁴⁴⁾とする。また、「『社会的なまとまりは主にXでできている』といった類の宣言から始めないことが決定的に重要⁽⁴⁵⁾であり、「したがって、社会的なものを、(中略)、つなぎ直し、組み直していく固有の動きとして定義するにとどめようとしているわけである⁽⁴⁶⁾と自らの視点を述べている。造形活動や語り合う活動を行う本題材は、行為者である10名、素材、叩く道具、学校、美術館、研究者(筆者)などの「つながり」を形成する「連結装置」として作用するといえる。また、本題材の作用により形成されていく「動き」としての生きた「つながり」は、芸術的行為を通して形成された「社会的なもの」であって、その「つながりをたどる」本研究は、ラトゥールが定義し直す「社会学」の性質を有しているといえる。以上から、ラトゥールは、「社会学者」が述べるところの「いつもの社会的な紐帯とは似ても似つかぬ『紐帯』によって結びつけられている」のが「私たち⁽⁴⁷⁾であり、「いつもの社会的な紐帯」を表す「ネットワークは、あるテーマについて調査後に書かれたテキストの質を示す指標でしかない。ネットワークは、テキストの客観性の程度を表すものであり、つまりは、他のアクターに思いもよらぬことをさせる各々のアクターの方

能を表すものである。上手く書かれるテキストによって、書き手が、一連の翻訳として定義される一連の関係を描ける場合に、アクターのネットワークが明るみになるのだ⁽⁴⁸⁾⁽⁴⁹⁾と述べる。更に、「ネットワークは概念であって、外在するものではない。ネットワークは、何かを記述するのに役に立つツールであって、記述される対象ではない⁽⁵⁰⁾とし、「種々雑多なアクターのあいだの結びつき」は「調査によって定まることになる⁽⁵¹⁾とする。つまり、「書き手」(研究者)が、「アクター」同士の関わりを「調査」することで、「アクターの力能」や特性、「アクターのあいだの結びつき」などを描き出した「テキスト」が「ネットワーク」であるといえる。本題材を微視的に分析考察することにより、「アクター」として影響し合う「人や事物」、つまりは行為者と物や行為者同士の紐帯の形成過程を書き表す「テキスト」が、「アクターのネットワーク」という「ツール」として記述できるといえる。ラトゥールは、「エージェンシー」との関係から「アクター」について詳述している。ラトゥールは、「エージェンシーは、何かをするものとして、常に報告に現れる。つまり、ある事態に何らかの変化〔差異〕を作り出し、Cによる試行^{トリアル}を通してAをBに変換するものとして現れる。(中略)差異を作らず、変化を生まず、痕跡を残さず、報告に入らない不可視のエージェンシーは、エージェンシーではない⁽⁵²⁾とする。また、「差異を作り出すことで事態を変える物事はすべてアクターである—あるいは、まだ形象化されていなければ、アクターである。(中略)つまり、そのエージェントは、他のエージェントの行為の進行に差異〔変化〕をもたらしているのか、いないのか。そして、誰かがその差異を見出すことを可能にする何らかの試行があるのか⁽⁵³⁾ないのかが、「アクター」であるかないかを分けるとする。従って、活動の過程において行為者のふるまいの変化を「差異」として生じさせる「道具は、私たちの定義ではアクターであり、もっと正確に言えば、いつ形象化されてもおかしくない行為の進行への参与^{participant}子⁽⁵⁴⁾である⁽⁵⁴⁾とする。また、「エージェンシー」としての物の例として、「レンガの壁は、いったん築かれれば一言も発しない—労働者のグループは話し続け、たとえ落書きが壁面に増えていくにしても。(中略)モノは、まさに人間と結びつくという性質ゆえに、媒介子の地位から中間項の地位へとたちまち変転し、どんなに中身が複合的であろうとも、一かゼロのどちらかでしかなくなる。したがって、〈モノが話をする〉ようにするために、つまり、モノに、自分自身の記述を生み出させ、他のもの—人間や非人間—toにさせていることのステリプトを生み出させるために、具体的な策を練らなければならない⁽⁵⁵⁾(中略は筆者)と述べる。人や物の種別を問わず、相手に「何らかの変化〔差異〕を生じさせたり、何らかの「痕跡」を残したりすることで観察された存在が「エージェンシー」であり、「差異を作り出すことで事態を変える」人や物は「すべてアクターである」といえる。しかし、「モノ」(物)の場合は、「他のもの—人間や非人間」に「何らかの変化〔差異〕を与える「ステリプト」として作用しなかった時は「中間項」として存在するに留まり、「他のもの—人間や非人間」に「何らかの変化〔差異〕を与えた時に「参与^{participant}子」として作用するといえる。本題材では、活動場所を共有した行為者が、互いのふるまいや語りを見たり聞いたりしながら、自らのつくり方や互いの造形物の価値付け(または意味付け)を変化させていく、行為者の見方や感じ方の変化が起こる。または、造形活動や語り合う活動、造形物の展覧会といった「具体的な策」を通して、変化していく素材の形や表面に刻まれた金錠の痕跡を見たり触れたりしながら、自らの叩く行為や、互いの造形物の価値付け(または意味付け)などを変化させたりしていく。行為者同士(または鑑賞者同士)の関わりにおいても、行為者と物(または鑑賞者と物)の関わりにおいても、相互に「何らかの変化〔差異〕を生じさせる本題材と本展覧会では、行為者と物(または鑑賞者と物)が共に「アクター」として作用し合う関係にあるといえる。ラトゥールは、以上の「社会的^{ソーシャル}」を捉える視点が「『アクター—ネットワーク—理論』(actor-network-theory)⁽⁵⁶⁾⁽⁵⁷⁾であるとする。ANTにより、「①相互作用から『コンテキスト』への自動移動を終わらせるために、グローバルなものを位置づけ直す、②相互作用もまた抽象的なものであることを理解するために、ローカルなものを分散させ直す、③以上の二つの手立てによって明らかになる場を結びつけ、つながりとしての社会的なものの定義を成り立たせるさまざまな移送装置を明らかにする⁽⁵⁸⁾とする。そして、「ローカルな場は、別の場所、時間、エージェンシーを介して何かをするように作られているのだから、私たちは、あるローカルな相互作用から、別の場所、時間、エージェンシーに至る道を切れ目なく結びつけなければならない⁽⁵⁹⁾と述べる。「よりローカルなものよりグローバルなものあいだに、大きな割れ目、切れ目を持ち込んでしまう」ことなく、「ローカルな相互作用から、自らの行為を委任している数多くのアクターへと途切れることなく向かえる」ことができれば、「すべての点が、永平に並んだままになるだろう。つまりは、結びつきが、襲^{ひだ}となって現れること⁽⁶⁰⁾になり、「『ローカルな』記述が何か『もっと大きな』ものの『枠にはまっている』ことを私に信じさせる⁽⁶¹⁾と述べる。本題材の分析考察を通して、ある特定の行為者と素材や叩く道具といった「アクター」が生み出す「ローカルな相互作用」、及び活動場所を共有する他の「アクター」らが生み出す「ローカルな相互作用」、及び当展覧会において美術館に展示した行為者の造形物と美術館の鑑賞者が生み出す「ローカルな相互作用」といった、「別の場所、時間、エージェンシー」によって生み出される「ローカルな相互作用」同士が「切れ目なく結び」つく紐帯の動きを捉えることは、「グローバル」な「社会的なもの」と「ローカルな相互作用」とが「永平に並んだまま」の「結びつき」を

捉えることにつながる。そして、「『ローカルな』記述が何か『もっと大きな』ものの『枠にはまっている』こと」を示すといえる。先行研究では、本題材の造形活動において関わり合う行為者、素材、叩く道具が、叩く行為の変化を通して一体的に形成されていく関係として観察された。また、語り合う活動では、行為者同士が造形物を介して素材を金槌で叩いた互いの経験や造形物への価値付けを共有して受容し合う関係が観察された。更に、本題材や本展覧会に関わった行為者と鑑賞者の関係が、造形物の触り心地を味わい共有する身体経験を通して形成された。これらの共感の関係が形成された過程を「アクター」の動きや変化として分析考察することにより、造形活動や語り合う活動を通して形成される紐帯の動きを、「ネットワーク」として記述することができるといえる。

本研究では、造形活動と語り合う活動を実践する行為者、及び素材や叩く道具などの物、物に触れる鑑賞者が「アクター」として相互に影響し合うことで、「何らかの変化〔差異〕」を与え合いながら実践の内容や経験が共有されていく紐帯を共感の関係とし、その共感の関係を描き出す「テキスト」を共感的ネットワークと位置付ける。

1. 4 研究の方法

本研究では、2020年2月20日にK高等学校で実践した本題材と、同年3月11日から4月5日にかけて搬入と展示を行った本展覧会の動画と静止画の記録(表2)を、本題材に焦点化して分析考察する。造形活動と、つくった造形物を見て触りながら語り合う活動は、BがEとUとL、NがTとRとM、第1筆者(W、元同校教諭)がYとT、JがAとKとH、SがOとLを参与観察して記録したと共に、据置カメラを2台設置し全体を記録した(図3)。搬入と展示の活動は、第2筆者(D)が据え置きカメラで記録した(図4)。場面分け(表3)した記録を記述分析(表4)⁽⁶²⁾及び画像分析(表5)し、研究の視点に基づいて考察した⁽⁶³⁾。

【I】【II】は授業時間だが、【III】【IV】【V】は授業時間外に行った。予定が合わず、語り合う活動【III】へ参加した時間は各高校生で異なり、HとLは参加しなかった。搬入活動【IV】はW、K、E、Dの4名で行った。大平(2021)及び大平・松本(2021)ではRに着目して分析考察したが、本研究では、造形活動において他の行為者と活発に関わり合い【II】、語り合う活動においても自らの味わった経験を積極的に語った【III】(表6)、Tを中心に記述分析し考察する。

表2 記録の概要

場所：N県K高等学校音楽室(造形活動)と自習室(語り合う活動)、N県I美術館(展示活動、展示期間)
日時：2020年2月20日15時20分～16時10分(造形活動)【I】【II】 16時30分～17時50分(語り合う活動)【III】 2020年3月11日13時30分～14時30分(搬入活動)【IV】 2020年3月12日9時00分～4月5日15時00分(展示期間)【V】
対象：同校第1学年8名(R、T、M、Y、A、K、H、L)、館長E、同校卒業生U(大学2年生)、 展示期間に訪れた美術館の鑑賞者(女児G)
授業者：第2筆者(D) ※搬入活動と展示期間は記録者兼任 参与観察者：第1筆者(W、元同校教諭)、第2著者指導教員(B)、 大学院生3名(N、J、S)

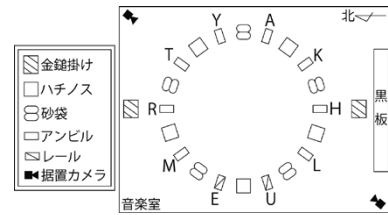


図3 制作時の道具や受講者の配置

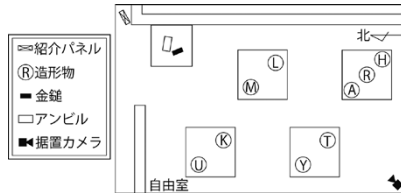


図4 I美術館での展覧会場

2 記述分析及び考察

2. 1 記述分析

2. 1. 1 場面【I】

休み時間、活動場所へやって来た高校生はWに案内されて、自分の使用するアンビルを決め図3の位置に立つ。

2. 1. 2 場面【II】

Dの紹介や授業時間外の活動に関する連絡をWが行い、Dが造形活動の説明をしていく。全員で素材を手にとった時、微笑みながら「すげ：：すげ：：」と言ったTを見て、Rが素材を持ち上げながら「これ↑」と聞くと、Tが素材の感触を両手で握り確かめながら「おもたい」と言う。微笑むTを、RとYが微笑みながら見る【II-i-(1)】。Dが試しに高校生へ素材を叩いてもらうため、Lを指名すると、Lはレールの前に座り軍手をつけた左手で素材を持つ。試しに素材を金槌で叩いたLを見て、Rが「お↑↑：：：」【II-i-(2)】と言う。Lに続いて、Dが右手で素材とアンビルの隙間を指し「ここをこ：：：(0.4)ちょっと開けると：：：(0.2)この分(0.4)変形します」【II-i-(3)】と言うと、Wが「ふ：：：ん」と言う。Dが「だけど：：(0.2)あの(0.4)ここを：(0.2)1cm以上あげると：(0.2)叩いた時に左←左手に負担がもろにかかるので止めてくださいh」と怪我をしない叩き方を説明してから、「思

表3 場面分け

I-i 活動場所への集合
II-i 活動及び注意事項の説明
ii 金属素材を金槌で叩く
iii 互いの造形物に触れ合う
III-i 造形物を渡し合い味わう
ii 活動について語り合う
iii 鍛金製品をスライドで見る
IV-i 美術館への搬入
V-i 美術館での展示公開

表4 記述の表記と意味

表記	意味
：	音声の引き伸ばし
[]	音声の重なり
h	呼吸音・呼吸音・笑い
↑ ↓	音韻の極端な上がり下がり
()	聞き取り困難な箇所
-	言葉の途切れ
(n.m)	沈黙・間合い

表 5-1 画像分析

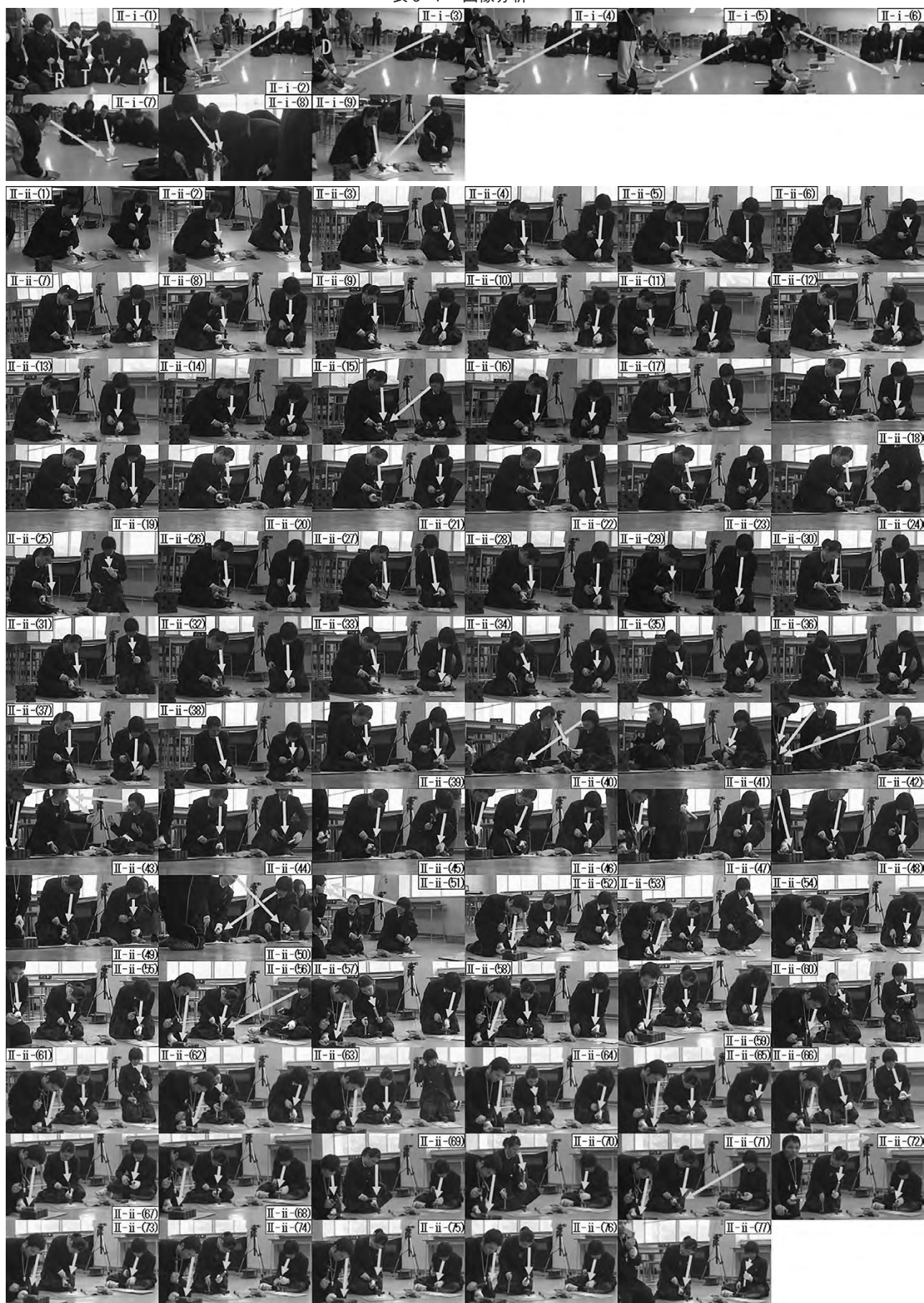


表 5-2 画像分析



表 6 語り合う活動におけるTのふるまいと造形物の関係

Tが「まんなかのらへんは:::(0.4)桜が:::(0.2)落ちて
いるように::まばらにした」【III-ii-(4)】と語った部分

いっそ叩く【II-i-(4)】と言い実演する。Dが「こん時に::-これ(0.2)動くから:::」と言いながら、叩くのを止めアンピルの向きを直して、アンビルが固定してある段ボールに両膝を乗せると、Tが「hhh-hhh」【II-i-(5)】と微笑みながら前屈みになる。Dが改めて素材を叩くと、金鋸の頭が柄から外れて床に転がる。Tは、口を開けながら床に落ちた金鋸の頭を見て、Dは「hhh抜けた↑:::」【II-i-(6)】と言い、Wは「h↑h↑↑h↑↑↑h↑↑↑↑」と笑う。Dは、1歩踏み出して手を伸ばし、金鋸の頭を拾ってから立ち上がり、「抜けたら:::(0.2)持って来てくださいね:::(0.4)直すから」と言い、金鋸の頭と柄を繋げる。Dが、アンピルの前の位置に戻ってから、試しに叩いた素材を高校生の前に置き「このくらいの(0.4)痕が付く」【II-i-(7)】と言うと、全員がDの放り置いた素材を見る。Dが叩き方や金鋸の種類を説明してから軍手を配ると、Tは自分の左手に軍手を付ける。全員が金鋸を取りに行く。Tは、「これ↑」【II-i-(8)】と言って北側の金鋸掛けの金鋸を取り、アンピルの前でしゃがみ左手で握った素材をアンビルの上に置くと、隣でしゃがんだYがTの素材を見て【II-i-(9)】、左手で持った素材をアンビルの上に置く。全員が位置についてから、Dが笛を吹いて造形活動を開始する。

金鋸の大きい面を使って叩き始めたTは、素材とアンピルの接点と金鋸で叩く位置とを揃えて素材の芯を上手く叩くことができず、また金鋸を振る右手の力や素材を握る左手の力が弱いため、叩く衝撃でアンビルの上から素材がずれる【II-ii-(1)】。Tは、左膝の右側に当てて固定していた左肘を上げ、左肘を左脚の左側に当ててから素材を叩く【II-ii-(2)】。Tは、素材の角をアンビルに当て素材を斜めに保持しながら素材の中部を叩く【II-ii-(3)】。Tはアンピルの向きを直してから、素材の側面をアンビルに当てて金鋸で素材の中部を叩くが、左手で握る力が弱く、叩くたびにアンビルから素材が跳ねる【II-ii-(4)】。Tは素材の端部をアンビルにつけて金鋸で素材の端部を叩く【II-ii-(5)】。Tは、前方へ動いたアンビルを両手で足元に引っ張り、アンビルが固定された段ボールの上に両膝で座り直す。そして、素材とアンピルの隙間を広げたり閉じたり、素材を少しずつ回転させたりする方法を交えながら、素材の端部から中部にかけて叩く【II-ii-(6)】。Tの叩くリズムとYの叩くリズムが合う【II-ii-(7)】。素材の中部をアンビルに当てて素材の中部を叩く【II-ii-(8)】。Tは、叩くことで前方へ動いていったアンビルを足元へ引っ張り、アンビルが固定された段ボールの上に両膝で座り直し、素材の側面をアンビルに当てて素材の端部から中部を叩く【II-ii-(9)】。Tは、金鋸を持ち換えて小さい面と大きい面を使い分けながら素材の端部から中部を叩く【II-ii-(10)】。Tは、右手の親指を伸ばして金鋸を持つ方法【II-ii-(11)】、右手の親指と人差し指で金鋸の柄を掴んで握る方法【II-ii-(12)】、右手の人差し指と親指を伸ばして金鋸を持つ方法【II-ii-(13)】を交えて叩いていく。Tは、左膝を立ててしゃがみ、左脚の右側に左肘を当て左腕を固定して素材を叩く【II-ii-(14)】。Tは、しゃがみ直すと同時に、素材の角をアンビルに当てて素材を斜めに保持して、素材の端部を叩き、Yは、Tが握る金鋸と素材を見る【II-ii-(15)】。Tは、両膝を揃えて座り直してから素材の側面をアンビルにつけて叩く【II-ii-(16)】。Tは、

素材を左手で逆手に持ち換え素材の中部を叩く【II-ii-(17)】。Tは、素材を真っすぐ持ち換えて素材の端部から中部を叩く【II-ii-(18)】。Tは、金鋸の柄の中部を右手で握り直し素材の端部を叩く【II-ii-(19)】。Tは、金鋸の柄の下部を右手で保持し直して素材の端部を叩く【II-ii-(20)】。Tは、素材の角をアンビルに当て素材を斜めに保持しながら素材の端部を叩く【II-ii-(21)】。Tは、素材の側面をアンビルに当てて素材の端部から中部を叩く【II-ii-(22)】。Tは、素材の角をアンビルに当てて素材を斜めに保持しながら素材の端部を叩く【II-ii-(23)】。Tは、叩いていた素材の端部を左手で保持し直し、素材をアンビルに当てて、素材の端部から中部を叩く【II-ii-(24)】。Tは、前方へ動いたアンビルを足元へ引っ張り直し、素材を回転させながら素材の表面を見る。素材の端部をアンビルに当て素材を斜めに保持し、素材の端部を叩く【II-ii-(25)】。Tは、右手で金鋸の柄の中部を握り直し素材の端部を叩く【II-ii-(26)】。Tは、右手で金鋸の柄の下部を握り直し素材の端部を叩く【II-ii-(27)】。Tは、素材の端部から中部をアンビルに当て、素材の端部から中部を叩く【II-ii-(28)】。Tは、素材の端部をアンビルに当て素材を斜めに保持し、素材の端部を叩く【II-ii-(29)】。Tは、素材を回転させながら素材全体を見渡して、素材を両手で持ち素材端部の表面を見る【II-ii-(30)】。素材の端部を左手で保持し直し、素材の端部をアンビルに当て、右手で柄の下部を握り直した金鋸の小さい面で素材の中部から端部を叩く【II-ii-(31)】。Tは、素材の中部から端部をアンビルに当て、素材の中部から端部を叩く【II-ii-(32)】。Tは、素材の端部をアンビルに当て素材を斜めに保持し、素材の端部を叩く【II-ii-(33)】。Tは、左手で握った素材を持ち上げ素材の側面を見て【II-ii-(34)】、金鋸の柄の下部を右手で握り直し、アンビルに端部を当て斜めに保持した素材の中部から端部を金鋸の大きい面で叩く【II-ii-(35)】。Tは、素材の中部から端部をアンビルに当て、素材の中部から端部を叩く【II-ii-(36)】。Tは、素材の側面を見てから、素材の端部をアンビルに当て斜めに保持し、素材の端部を叩く【II-ii-(37)】。Tは、素材表面の金鋸の痕跡を見て、素材の端部を叩く【II-ii-(38)】。Tは、素材の中部から端部をアンビルに当て、素材の中部から端部を叩く【II-ii-(39)】。Dは笛を吹き、「疲れませんかと思って」「ちょっと小休憩をー」「ちょっと隣さんじよ：-どんなふうに叩いてるか」「ものをちら見しながら」と休憩を提案すると、Tが「ちょっと見ていい」と言いながらYの持つ素材を覗き込む【II-ii-(40)】。Tは、「足が痛い」と言いながら右手で自分の右脚を撫でる。Tは、右手の平を広げて「まめができた」と言いRを見る③【II-ii-(41)】。Rは自分の左手の平を見て微笑む。Dが、Tの右側のハチノスの前に座り「休み終わった人から叩きはじめてください」「わたしも叩きます」と言い、試し叩きした素材を叩き始めると、全員がDの素材の変化や叩く行為を見る【II-ii-(42)】。TとYが互いの手の平や互いの顔を見合いながら「痛い」【II-ii-(43)】と言い微笑み合う。Tは左手で素材の端部を保持し、アンビルに素材の中部から端部を当て、右手で柄の下部を握った金鋸の大きい面で素材を叩く【II-ii-(44)】。Tは、アンビルに素材の中部から端部を当てたまま、素材の角を叩く【II-ii-(45)】。Tは、金鋸を置き右手の平についた金鋸の柄の痕を見てから【II-ii-(46)】、金鋸の柄の下部を右手で握り、金鋸の大きい面で素材の角を叩く。Tは立ち膝になり、周囲を見回してから【II-ii-(47)】、両膝を揃えて座り直し、素材の端部をアンビルに当て斜めに保持して、素材の角を叩くが【II-ii-(48)】、すぐに素材の中部から端部をアンビルに当て直し素材の角を叩く【II-ii-(49)】。Dに耳栓を配られたため、Tは、YとAの素材を見てから【II-ii-(50)】、左手につけていた軍手はずして、素材と金鋸を置き耳栓の袋を開ける。Yも素材と金鋸を置いて耳栓の袋を開ける。Dに耳栓の付け方を説明され【II-ii-(51)】、TとYは耳栓をつける。Tは、左手で素材の端部を保持し、素材の中部から端部をアンビルに当て、金鋸の大きな面で素材の角と端部を叩く【II-ii-(52)】。Tは、素材の端部をアンビルの角に当てて素材を斜めに保持し、素材の角を叩く【II-ii-(53)】。Tの叩くリズムとDの叩くリズムが合ってくる【II-ii-(54)】。Tは、素材の中部から端部をアンビルに当てて保持し、素材の角を叩いてから【II-ii-(55)】、素材の端部をアンビルに当て素材を斜めに持ち、素材の角を叩く【II-ii-(56)】。Tは、素材を持ち上げ、素材の角につけた金鋸の痕跡を見てから【II-ii-(57)】、素材の端部をアンビルの角に当てて素材を保持し、素材の角を叩く【II-ii-(58)】。Tは、素材の角をアンビルに当てて保持し、素材の角を叩いて【II-ii-(59)】から、素材を持ち上げて素材の端部とその角を見る【II-ii-(60)】。Tは、素材の端部をアンビルに当て素材を斜めに保持し、素材の角を叩く【II-ii-(61)】。素材を持ち上げて素材の端部とその角を見ながら左手の親指で撫でる【II-ii-(62)】。Tは、左手に軍手をつけてから素材の端部を持ち、素材の端部をアンビルの角に当てて、素材の角を叩く【II-ii-(63)】。素材を持ち上げ、素材の角を見てから【II-ii-(64)】、素材の端部をアンビルに当て、素材の角を叩く【II-ii-(65)】。Tは、素材を持ち上げて、素材の角を見てから足元に素材を立て置き、左手の親指で素材の角を触ってから【II-ii-(66)】、素材の端部を左手で保持し直し、素材の端部をアンビルに当て、素材の端部とその角を叩く【II-ii-(67)】。Tは、素材の端部をアンビルに当てて素材を斜めに保持し、素材の角を叩いてから【II-ii-(68)】、左膝を立ててしゃがみ直して、左脚の右側に左肘を当てて左腕を固定し、斜めに保持した素材の角を叩く【II-ii-(69)】。Tは、素材を持ち上げて素材の角を見てから【II-ii-(70)】両膝を揃えて座り直して、素材の端部をアンビルに当て素材を斜めに保持し、素材の角を叩く【II

-ii-(71)】。Dが時計を見て周囲を見渡して、Tが素材を持ち上げて素材の角を見てから【II-ii-(72)】、素材の端部をアンビルに当てて素材の角を叩いた時【II-ii-(73)】、Dと叩くリズムが合う。Tが、素材を持ち上げて素材の角を見る【II-ii-(74)】、素材の端部をアンビルに当てて素材の角を叩く【II-ii-(75)】、素材を持ち上げて素材の角を見る【II-ii-(76)】、素材の下部をアンビルに当てて素材の角を叩く【II-ii-(77)】、などの行為を繰り返してからDを見たあとに周囲を見回す。

Dが笛を吹いたことで制作を止めた高校生らは、互いの造形物に触れ合う。Tは、自分の造形物を立てて置く【II-iii-(1)】。Rが、Tの造形物を手に取り見ていると、Aが「えすごくな↑：：い↑」と言いながらTの造形物に触れる。Rは「えすごくな：：い↑これ」と言いながらTを見る【II-iii-(2)】。Tは活動場所を歩き、Uの造形物を見てから【II-iii-(3)】、しゃがんでEの造形物を見る。Lが「危ないかも」と言うと、Tが「切れる↑これ切れそう」と言いながらEの造形物に触れた自分の左手の親指と人差し指を擦り合わせて、Lが左手の人差し指でEの造形物の角に触れ【II-iii-(4)】、Yが左手の人差し指でEの造形物の側面を撫でる。Mの造形物を見て、Yが「なんかさ：：(0.2)ちっちゃい方もい：：んだね：：(0.4)ハンマ：：：」と言いながらしゃがむと、Mの造形物をTも覗き込み「え-ちっちゃいの[好き：：]」と言う。Mの造形物に右手で触れながら、Yが「[絶対]さ：：これ(0.2)これ絶対さ：：(0.2)跡つかないと思ってたわ」と言うと、Tが「あ：：：：：」【II-iii-(5)】と答える。Yが右手で触れながら転がしているMの造形物を見て、Tが「え(0.2)なんか(0.2)鱗みたい」と言ってから、右手の人差し指でさし示し「これさ：：爬虫類」【II-iii-(6)】と言うと、Yが「爬虫類↑分かる分かる↑」と笑い顔ながら右手をMの造形物から離す。Mは自分の造形物を見ながらTとYの語りを聞いている。Tは、RやAやYやUと共にRの造形物を見て、左手でRの造形物を持ちながら「集中攻撃してるじゃんこれ」【II-iii-(7)】と言うと、Yが「h h h h」と笑う。Aが右手でRの造形物に触れると、TがRの造形物から手を放し、Rが「うんめちゃめちゃにした」と答える。Rの造形物をAが持ちあげて両手で持つ。高校生は名前を書いたシールを自分の造形物に貼り、挨拶して教室へ戻る【II-iii-(8)】。

2. 1. 3 場面【III】

TとRは自習室に来て、U、E、Dと共に椅子を円に並べて座る。Dが、左側に座る人へ造形物を渡しながらかみ打の痕跡を触って味わうよう指示したあと、高校生らは造形物を渡し合い味わっていく【III-i-(1)】。

造形物の渡し合いが終わると、Dが、他の人の造形物に触れて見た感想や、造形活動を通して見たこと、感じたこと、思ったことなどの経験について語るよう指示した。Tは、「私は：：(0.4)最初は：：なんか：：(0.2)けっこ：：(0.4)ストレス発散になるかな：：と思って：：(0.8)き：むけ-叩くことしか：意識してなくて：(0.2)て：：まとか：：何か(0.2)何もほんとに何も思い描いていなかったんですけど：：：h：何か叩いていくうちに：：(0.2)3回で：：まが変わって来て[：：：]【III-ii-(1)】と言うと、Dが「[あ：：ん」と言い、Eが「う：：ん」と言って頷く。Tが「ほんとにただの塊じゃないですか：鉄の」と言い、Dが「はい↑」と返答すると、Tが「それを：自分で何か：：(0.2)形づくるって何か面白いなって思いました」と言いDを見る。Dが「具体的に聞いていいですか↑：：」と聞くと、Tが「あて：：まですか↑：」とDに聞き返す。Dが「あ：そ：はい3回変わったて：：まっていうのが[-そのつど-ど：：いったて：：まに]【III-ii-(2)】と聞くと、Tが「[3回変わった]、[最初は：(0.6)え：：と(0.4)何かあの(0.6)ほんとにただの：：その(0.4)とりあえずその(0.4)リュウみたいな]【III-ii-(3)】と言いながら右手で自分の造形物の側面を撫でる。Tが、造形物の側面を左右に撫でながら「ぜんぶ：：(0.2)ば：：ってやって(0.4)あ：リュウだな：：って」と言い造形物を見て、「あ↑-すみません(0.2)2回だったんですけど：：(0.2)あ：h h」と言い、テーマが3回ではなく2回変化していったと訂正する。Tは「最初は：：(0.2)ほんとに：：(0.4)なんかリュウに見えて：：(0.8)で：リュウの鱗を表現しようと思ってやってたんですけど：：(0.2)それで：何かだんだん浸食してって：：ちょっとこっち(0.4)反対側も叩いてみたら：(0.4)何か桜-が：：(0.4)桜に見えて：-きて：(0.2)だから：：(0.2)この：：(0.2)まんなかのらへんは：：：(0.4)桜が：：(0.2)落ちているように：：まばらにしたんですけど[ど：そういうふうには：何か]【III-ii-(4)】と言い右手の人差し指で造形物の側面中央を指す。Eは、Tの指先を見て「ほ：：：」と言い頷く。Tは「でそれで：：(0.4)最後の方で：なんか-ちょっと木っぽくしたくて[：：：]-こちを中心にして(0.4)た]たいたりして」【III-ii-(5)】と造形物の先端を指して言うと、Tの語りを聞きながらDが「[お：：：]」と言い、Eが「[あ：：：]」と言って頷く。続けてTが「こういう鉄の塊だから：(0.2)自分の思いえがいてるやつ[だと]難しそうだったけど：(0.4)けっこう何か(0.4)やりたように(0.2)なるんだな：：って[思いました]」と言うと、Tの語りを聞きながらEが「[お：：：]」と言い、Dが「[お：：：]」と言って頷く。Tを見ながら、Dが「とっても嬉しい↑↑h h[h h-h-h]ありがとうございます」と言うと、Tも「[h h h h]」と笑いDと視線を交わす。Dは「実はさいしょ：思ったこ-想定したよりも形が変わらないから形これ全体の形ですよ↑↑」【III-ii-(6)】と言いながら自分の造形物に右手を掲げると、Tが

「h : : : ん」と言い話し、Dが「あちょっと焦ってました(0.2) ↑ h h h h 済みません(0.2) 授業者の反省です」と言う。続けて語り合っていると、途中でAが加わる。Uは、Tを見て「さっき言ったけどで : : まが変わったみたいな(0.4) わたしもけっこう変わって : : (0.2) なんか叩いてると : : (0.8) 思ってる以上に何かあとがついちゃうからもう何だろ自分が思ってたものじゃなくなっちゃって : : あれ↑みたいな(0.2) なったから : : (0.4) なに↑(0.2) 何だろ(0.4) ま : 遠くから見れば全然変化は無いけどいがい : と自分にとっては : :すごい(0.8) 小さいも : 何か大きい変化に(0.4) 感じて : (0.6) つくれたかな : : って(0.4) 思います」【Ⅲ-ii-(7)】と言うと、Tは、Uの表情を見ながら頷いて微笑み、Rは、Uの造形物を見る。その後、Y、Kがやって来て共に語り合った後、Dが渡したタイトルの見本を見て【Ⅲ-ii-(8)】、RとTは自分の造形物のタイトルと、そのタイトルにした理由を互いに見合いながら記入し退室する。最後に、Mがやって来てしばらく語り合ってから、A、Y、K、U、Eが造形物のタイトルと、そのタイトルにした理由を記述し退室する。

その後、Dが各鍛金技術の概要を説明してから、急遽、NとWが参加しMと共に鍛金製品をスライドで見てどのような鍛金技術で製造されたのか答えていく活動【Ⅲ-iii-(1)】を行い、この日の授業は終了した。

2. 1. 4 場面【Ⅳ】

搬入は、K、E、W、Dが協働で行った。Kは、授業全体を通して「楽しかったです」【Ⅳ-i-(1)】と感想を述べた。

2. 1. 5 場面【Ⅴ】

展示した造形物は、美術館を訪れた地域住民に出合っていた。特に、3月5日に訪れた家族は次のように造形物を味わった。

Gは、MとLの造形物を同時に持ち上げ微笑みながら「めっちゃ重いな : : :」と言ってから、「ここが1番いい」【Ⅴ-i-(1)】と言いながら、Mの造形物の側面を端部から中部まで両手で撫でる。Gは、他の造形物に対しても同様に触ったり持ちあげたりしながら味わっていた。

4月5日、DとWが協働して搬出し全授業行程が終了する。

2. 2 考察

2. 2. 1 芸術的行為を通じた造形物の超特異化により形成される紐帯

Tは、造形活動の過程で、はじめは、素材とアンピルの接点と金鋸で叩く位置とを揃えて素材の芯を上手く叩くことができず、また金鋸を振る右手の力や素材を保持する左手の力が弱いため、叩く衝撃でアンピルの上から素材がずれていた【Ⅱ-ii-(1)】。そして、左手で保持する力が弱く叩くたびにアンピルから素材が跳ねる【Ⅱ-ii-(4)】。叩いた際にアンピルから素材が跳ねる状況を変化させられなかった、Tは、金鋸の握り方を変える【Ⅱ-ii-(10~12)】【Ⅱ-ii-(18~19)】【Ⅱ-ii-(25~26)】【Ⅱ-ii-(30)】【Ⅱ-ii-(34)】【Ⅱ-ii-(41)】、叩く姿勢を変える【Ⅱ-ii-(2)】【Ⅱ-ii-(6)】【Ⅱ-ii-(13)】【Ⅱ-ii-(43)】【Ⅱ-ii-(62)】、アンピルの角を使って叩く【Ⅱ-ii-(48)】【Ⅱ-ii-(51)】【Ⅱ-ii-(56)】、などの変化を生み出しながら、素材や叩く道具を「身のうちに組み込」んで、自らの身体、素材、叩く道具との一体的な関係を形成していった。また、造形活動では、Tの叩くリズムが、Yの叩くリズムやDの叩くリズムと「同調」する場面【Ⅱ-ii-(7)】【Ⅱ-ii-(48)】があった。これは、行為者同士の「身」が「拡大」することによって、互いのふるまいを「把握」し合い「感应的に同一化」した、互いの「身になる」関係を、共感の関係として形成したことを示している。こうした、行為者の「身」が「拡大」していく行為の連鎖は、造形活動直後のTの発話「切れる↑これ切れそう」【Ⅱ-iii-(4)】、「鱗みたい」「爬虫類」【Ⅱ-iii-(6)】、「集中攻撃してる」【Ⅱ-iii-(7)】、語り合う活動におけるTの発話「リュウみたい」【Ⅲ-ii-(3)】、「リュウの鱗」「桜」「桜が : : (0.2) 落ちているように : : まばらに」【Ⅲ-ii-(4)】、「木」【Ⅲ-ii-(5)】の契機となった。このTの発話は、自他の造形物のもつ「異質」さに対する「価値づけ」を行為者が相互に行う過程で、造形物が行為者の間で超特異化していったことを示している。そして、自身がつくり出したり見付けたりして語った造形物の「異質」さが、他の行為者に「さっき言ったけどで : : まが変わったみたいな(0.4) わたしもけっこう変わって : : 」【Ⅲ-ii-(7)】と同意されたり、頷かれたりすることによって受け入れられていった出来事は、行為者同士が互いを受容し合う場として活動場所そのものが「価値づけ」され超特異化していったことを示している。本題材では、行為者の「身」の「拡大」により、素材、叩く道具、造形物、活動場所が行為者にとっての「非-中心化」の対象となつて、それらの対象と行為者が「互いに照応」する「入れ子構造」の関係としての紐帯を形成し、「自分が根拠づけられている、自分の存在理由があるという感覚」が行為者相互に味わわれ経験された。そして、行為者が、共通の素材、道具、活動場所を使いながらひたすら叩いていった、行為者にとっては不慣れた造形活動の過程は、「次の瞬間が予測できない。それは怖ろしく不安定」な経験の連続であり、その経験の果てに超特異化を可能にする「価値」が行為者によってつくり出されて見付け出されて共

有されていった本題材は、個々の行為者がそれぞれの対象との関係において「欠乏した自由」をつくり出し経験した実践の過程であるといえる。

2. 2. 2 芸術的行為の過程で生み出される紐帯を描き出した共感的ネットワーク

Tは、造形活動において、はじめに、素材を手に取り経験した「差異」を、「すげ：：すげ：：」「おもたい」【II-i-(1)】と発話し表した。そして、Tは、金鋸の握り方を変える【II-ii-(10~12)】【II-ii-(18~19)】【II-ii-(25~26)】【II-ii-(30)】【II-ii-(34)】【II-ii-(41)】、叩く姿勢を変える【II-ii-(2)】【II-ii-(6)】【II-ii-(13)】【II-ii-(43)】【II-ii-(62)】、アンピルの角を使って叩く【II-ii-(48)】【II-ii-(51)】【II-ii-(56)】、などの行為の変化として、造形活動の過程で経験した「差異」を表した。これは、素材に触れる行為や叩く行為により、T自身が「アクター」として素材や叩く道具へと関わり物を変化させていったことを示す。そして、素材の形や重さと、素材の表面につくられた金鋸の痕跡とが「スヶリヅト」として読み取られ、Tに「差異」を経験させたことを示している。Tの発話「すげ：：すげ：：」「おもたい」【II-i-(1)】を契機にRとYが微笑んだ場面は、RとYの「差異」を生み出す「アクター」としてTが作用すると共に、その「差異」がRとYの微笑みとして表された場面であり、素材の重さを共有するT、R、Yの「つながり」が新たな関係として形成された場面といえる。素材、叩く道具、活動場所を共有する関係を土台として行われたTの叩く行為は、場面【II-ii-(7)】【II-ii-(48)】においてYの叩く行為やDの叩く行為と同じリズムを刻んだ。これは、同様の素材と同様の道具とを使って叩く行為に着目した造形活動ならではの「つながり」の形成を示している。造形活動直後のTは、自らの造形物を介して他の行為者に「差異」を経験させ、Aの発話「えすごくな↑：：い↑」やRの発話「えすごくな：：い↑これ」【II-iii-(2)】を生み出した。また、Tは、活動場所を歩き他の行為者の造形物を見て回った。Tは、Eの造形物を見たり触ったりしながら「切れる↑これ切れそう」【II-iii-(4)】と言いKやYに関わったり、Mの造形物を見て金鋸の「ちっちゃいの[好き：：]」【II-iii-(5)】、「鱗みたい」「爬虫類」【II-iii-(6)】と言いYと関わったり、Rの造形物を見て「集中攻撃してる」【II-iii-(7)】と言いR、A、Y、Uと関わったりした。Tの造形物を介したAやRの発話【II-iii-(2)】は、Tの造形物とT自身が、他の行為者に「差異」を経験させる「アクター」として作用したことを示している。また、各自の造形物を介したT、K、Y、R、A、Uの関わり【II-iii-(4~7)】は、各自の造形物や個々の行為者が、周囲の行為者に「差異」を経験させる「アクター」として相互作用し合ったことを示している。この相互作用は、行為者や物といった「アクター」同士の「つながり」そのものであり、素材を叩く造形活動を包摂する本題材だからこそ形成された生きた関係といえる。

Tは、語り合う活動において、自分の造形物を示しながら、造形活動の過程でテーマが2回変化したと語った【III-ii-(1)】【III-ii-(3~5)】。Tの語りに「差異」を経験したEやDは頷き、Uは「わたしもけっこう変わって：：(0.2)なんか叩いてると：：(0.8)思ってる以上に何かあとがついちゃうから」「自分が思ってたものじゃなくなっちゃって：：あれ↑みたいな」「遠くから見れば全然変化は無いけどいがい：と自分にとっては：：すごい(0.8)小さいも：何か大きい変化に(0.4)感じて：(0.6)つくれた」【III-ii-(7)】と語った。このE、D、Uのふるまいは、行為者と造形物が語り合う活動の過程において、Tの造形物とT自身が他の行為者に「差異」を経験させる「アクター」として作用したことを示している。造形活動の過程で活動のテーマが変化した経験を伝え合い受容し合うことで生み出された、語り合う活動における行為者と造形物の相互作用は、素材を叩く経験を共有する行為者同士の語り合う活動だからこそ生み出された「つながり」であり、造形活動の過程で見つけた解釈を受容し合い共有する関係であるといえる。

本題材で形成された「つながり」としての「ローカルな相互作用」は、本展覧会において展示した造形物を介してI美術館の鑑賞者へと「結び」ついていった。本展覧会を訪れて、「めっちゃ重いな：：：」「ここが1番いい」【V-i-(1)】と言い、MとLの造形物を同時に持ち上げたり、Mの造形物の側面を端部から中部まで両手で撫でたりしたGのふるまいは、Gを始めとする鑑賞者にとっての「差異」が造形物との出会いを通して経験されたことを示している。また、造形物と鑑賞者の出会いは、本展覧会において新たな「ローカルな相互作用」が生み出されたことを示している。本展覧会で生み出された「ローカルな相互作用」は、本題材で生み出された「ローカルな相互作用」と「別の場所、時間」において実践された。行為者が味わった造形物の形や触感や重さなどの触り心地と同様の身体経験を、造形物に触れる行為を通して鑑賞者が味わうことにより生み出された行為者と鑑賞者の「結びつき」は、「別の場所、時間」において実践された2つの「ローカルな相互作用」が「切れ目なく結び」ついた紐帯そのものであり、造形物の触り心地を共有して受容し合う紐帯として形成された共感の関係であるといえる。

本研究は、造形活動や語り合う活動を行った行為者と、行為者がつくり出した造形物を味わうI美術館の鑑賞者との共感の関係が「社会的なもの」として実践される芸術的行為の過程を、新たな「社会性」の「芽ばえ」として描き出した「テキスト」であり、共感的ネットワークそのものであるといえる。

3 おわりに

本研究では、高校生8名、同校卒業生1名(大学1年生)、館長といった行為者10名と物や行為者同士が一体的に関わる共感の関係が形成された題材と、行為者の造形物をI美術館の鑑賞者が味わう場面とを、「身体」と「社会的」の視点から微視的に記述分析して考察した。これにより、行為者と物や行為者同士の紐帯を新たな「社会性」として形成する芸術的行為の作用について、以下の3つを明らかにした。①自他の造形物や活動場所を行為者が相互に「価値づけ」していく超特異化の過程において、「次の瞬間が予測できない。それは怖ろしく不安定」な「欠乏した自由」を行為者が経験していく学びの作用。②造形物をつくり味わう行為者や物といった「アクター」同士の相互作用と、行為者がつくった造形物と鑑賞者といった「アクター」同士の相互作用との「つながり」を、「ローカルな相互作用」同士の紐帯として形成する作用。③造形物をつくった行為者と造形物を味わう鑑賞者とが、造形物の形や触感や重さなどの触り心地を身体経験として共有する共感の関係を「社会的なもの」として実践させていく作用。

本研究では、芸術的行為の3つの作用を明らかにする過程で、造形物をつくった行為者と造形物を味わうI美術館の鑑賞者との「つながり」を「ローカルな相互作用」同士の紐帯として描き出した。その紐帯が、ラトゥールの重視する「よりグローバルなもの」へと「結びつけられている」過程について描き出すことが今後の課題①である。また、本題材で使用した素材や叩く道具は第2筆者が学校の教室へと持ち込んだものであり活動場所にとっては遺物であることや、川俣が述べる「場力本願」のコンセプトを軸に本題材を計画していないため、研究実践がもつ「サイト・スペシフィック」の要素について検討することが今後の課題②である。課題①②を踏まえ、今後も、子ども、学校、美術館、アーティスト、研究者が協働で生み出す学びの場や「社会的なもの」を生み出す芸術実践研究を継続する。

謝辞

本研究に協力いただいた高校生の皆様、池田記念美術館で造形物を鑑賞された皆様、関係機関様に深く感謝いたします。

註及び引用文献

- (1) 八色の森の美術展実行委員会『『八色の森の美術展2019』記録集』共同印刷, 2020, p.1
- (2) 茂木和佳子・松本健義「美術館と連携・協働する高等学校の探究プロジェクトの事例研究」『上越教育大学研究紀要』第40巻第2号, 2021, p.418
- (3) 大平修也『芸術的行為による他者との共感的対話を通じた生活世界の生成に関する研究』兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士論文, 2021, pp.1-278
- (4) 大平修也・松本健義「金属素材を叩く行為による共感的身体経験と造形的自己変革の生成に関する研究—高校生を対象とした授業の開発実践と分析考察」『美術教育学』第42号, 2021, pp.99-118
- (5) 大平修也・茂木和佳子・松本健義「芸術的行為による身体経験の共有と意味世界の創造に関する研究—美術館での鑑賞行為を事例とした分析考察」『上越教育大学研究紀要』第41巻第1号, 2021, pp.133-147
- (6) 市川浩『〈身〉の構造』講談社, 2014, p.22
- (7) ラトゥール(Bruno Latour), 伊藤嘉高(訳)『社会的なものを組み直すアクターネットワーク理論入門』法政大学出版局, 2019, p.7
- (8) 鷺田清一『素手のふるまいアートがさぐる〈未知の社会性〉』朝日新聞出版, 2016, p.8
- (9) 同上, p.9
- (10) 同上, pp.9-10
- (11) 同上, pp.10-11, 「いいかえると、討議にもとづいた合意や結束を起点とするのではないようなグループ活動を繰り返しているように見える」とする
- (12) 同上, p.13, [英] Site-Specific, 「他の人たちが抱え込んでいるのとおなじ問題に、おなじ場所から、しかし別のまなざしを挿し込んで、そこから別の『リアル』を立ち上がらせること。川俣はこれを『サイト・スペシフィック』な行為と名づける」とする
- (13) 川俣正『アートレスマイノリティとしての現代美術』フィルムアート社, 2006, pp.34-35, 「『アース・ワーク』, 『ランド・アート』」について次のように解説する。「アリゾナの砂漠やニューメキシコ, ソルトレイクシティなどの荒野で、行為性を強く現わす表現を基本とした作品を制作した。人間のスケール感を越える自然の畏怖や神秘性を、改めてこの時期にアートのカテゴリーに組み入れた。この動きは、同時代のヨーロッパの作家にも波及したが、アメリカのアーティストほど自然に対する畏怖はなく、より人間的な視点とスケールで自然の野山を歩くような自己の身体性に重きを

置いた活動をする作家や、自然の中にある素材から作品を形作る作家などが現れた。しかしこれらの流れの中から、砂漠や山、草原など、自然の場より日常的な生活風景に対して同じようなアプローチをするアーティストも出てきた。彼らはたんに自然に対する畏敬に終わる観客ではなく、あるいはエコロジカルな環境としての視点で、アートとかかわろうとするのではない。実際に生活している都市空間にアクティヴにアプローチしていき、その中でアートの可能性を探ろうとした。それは、新たな『場に対する意識』を生むことになる」

- (14) 同上, p.35
- (15) 成相肇「インスタレーションInstallation」, 美術館・アート情報 artscape, 2018年5月26日(<http://artscape.jp/artword/index.php/>), 「据え付け、取付け、設置の意味から転じて、展示空間を含めて作品とみなす手法」とする
- (16) 川俣, 前掲書, 2006, pp.35-36, 「文化背景のまったく違う国でも人々が生活している空間は、同じ人間の営みであるわけで、生活条件においてそれほど大きくは変わらない。しかしその場の地理的な成り立ちや歴史, その背後にあるさまざまな人間関係がこの場を今現在の状態に形作っているのだとすると, それを改めてフィールドワークをし, 徹底的にリサーチすることによって, その人たちの姿がより明確に見えてくる。それを自分なりに解釈し, 作品行為のサブジェクトとして作品を組み立てる」とする
- (17) 鷺田, 前掲書, 2016, p.30
- (18) バフチン(Михаил Михайлович Бахтин), 望月哲夫・鈴木淳一(訳)『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房, 2002, p.226, [英] Dialogue, 「ともに真理を目指す人間同士」が「交流する過程」とする
- (19) フッサール(Edmund Gustav Albrecht Husserl), 細谷恒夫・木田元(訳)『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社, 1995, p.246, [英] Life-world, 「われわれがわれわれの学以前の, また学以外の生において経験するような, そして経験されたものを越えて経験可能であることを知っているような, 空間時間的な事物の世界」とする
- (20) ホール(Stuart Hall), 甲斐聡(訳)「ポスト・モダニズムと節合についてスチュアート・ホールとのインタビュー」『現代思想四月臨時増刊号第四二巻第五号』青土社, 2014, p.33, [英] articulation, 「二つの異なる要素を統合することができる, 連結の形態」とする
- (21) ヴァイツェッカー(Viktor von Weizsäcker), 木村敏・濱中淑彦(訳)『ゲシュタルトクライス知覚と運動の人間学』みすず書房, 2017, p.221 [英] Gestaltkreis, 「有機体(O)と環界(U)」の関係において「OがUに働きかけると同時にUがOに働きかけている」といった「有機体の運動形式の発生」とする
- (22) 橋本真之『造形的自己変革—素材・身体・造形思考』美学出版, 2016
- (23) 浜田寿美男『『私』とは何か』講談社, 2011, p.181, 「周囲のいろいろなものと関連づけてことばをしゃべる人間がいるからこそ, それが子どもにも聞き取られ, やがて子ども自身のものとなっていく」過程とする
- (24) 茂木・松本, 前掲書, 2021, pp.413-424
- (25) 矢守克也『アクションリサーチ実践する人間科学』新曜社, 2014, p.1, [英] action research, 「望ましいと考える社会的状態の実現を目指して研究者と研究対象者とが展開する共同的な社会実践」とする
- (26) ラトゥール, 前掲書, 2019, p.7
- (27) 市川, 前掲書, 2014, pp.21-22
- (28) 同上, pp.22-23
- (29) 同上, p.19
- (30) 同上, pp.19-20
- (31) 同上, p.20
- (32) 同上, pp.88-89
- (33) 同上, pp.89-90
- (34) 同上, p.90
- (35) 同上, p.91
- (36) 同上, p.92
- (37) 同上, p.158
- (38) 同上, p.159
- (39) 同上, p.161
- (40) 同上, p.154
- (41) ラトゥール, 前掲書, 2019, p.7, 本著では訳者の補足が〔〕で記されている
- (42) 同上, p.8
- (43) 同上, pp.12-14, 伊藤は「『コンテクスト』〔文脈〕(context), 「『インフォーマント [情報提供者]』(informant), 「アクター [行為者]」(actor)と訳す
- (44) 同上, pp.14-15
- (45) 同上, p.60, このXに当てはまるのが, 『個別的なエージェント』(agent)であろうと, 『組織』であろうと, あるいは, 『人種』, 『小集団』, 『国家』, 『人』, 『メンバー』, 『意志の力』, 『リビドー』, 『バイオグラフィー』, 『界/場』などであろうと, 違いはない(()内は筆者)とする。「エージェント」(または「エージェンシー」(agency))については後述する

- (46) 同上, p.18
- (47) 同上, p.18
- (48) 同上, p.244, [英] network
- (49) 同上, pp.237-238, ラトゥールは「テキスト」(text)を「文章」の意味で用いている
- (50) 同上, p.248
- (51) 同上, p.142
- (52) 同上, p.101
- (53) 同上, p.134
- (54) 同上, p.135
- (55) 同上, pp.149-150
- (56) 同上, pp.22-23, ANTとも表記されている
- (57) 同上, p.88, 「アクター—ネットワークという表現における『アクター』とは、行為の源ではなく、無数の事物が群がってくる動的な標的である」とする。「無数の事物」による「動的」な関係を表す用語といえる
- (58) 同上, p.332
- (59) 同上, p.333
- (60) 同上, p.334
- (61) 同上, p.359
- (62) 西阪仰『分散する身体エスノメソドロジの相互行為分析の展開』, 勁草書房, 2008, pp.xvii-xxii
- (63) 行為者の記録の収集及び画像の使用についてはK高等学校とI美術館を通じて許諾を得た。I美術館で造形物を鑑賞した鑑賞者には、撮影時に記録の収集及び画像の使用について許諾を得た

Formation of Empathic Networks and Singular Objects by the Artistic Act: An Examination in Hammering Metal Materials among High School Students

Wakako MOGI* · Shuya OHIRA** · Takeyoshi MATSUMOTO***

ABSTRACT

In this study, we formed relationships between people and things and people in the form of a new sociality and clarified the action of artistic acts that create the shape and value of people's own way of making and shaping objects. Here, we closely describe a case in which 10 actors, mainly high school students and objects and actors, were integrally involved and formed a sympathetic relationship. Examples included a modeling activity scene in which the actor hits a metal material, a scene of activity in which the actor talks about the experience of the modeling activity, and a scene in which the actor's model exhibited in the museum is touched and tasted by the visitor. Descriptive analysis and consideration of cases was used to characterize the interaction between actors and objects and the actors who created the value of their own and other sculptures and places of activity through artistic acts, as well as the interactions practiced in the viewing scenes of visitors. The relationships were formed with respect to relationships of empathy that shares the touch of the modeled object. The descriptive analysis and consideration of this study represents the network itself, which depicts the relationships between the interactions created at different places and times.